宇治拾遺物語「鬼に瘻取らるる事」について

中島悦次

○

宇治拾遺物語（十二世紀後期成立？）巻一第三話「鬼に瘻取らるゝ事」は、巻三第十三話「雀報恩事」（所謂腰折雀）と共に日本昔話として疑えないような話になってしまっているが、支那種であったことは意外に感じられたものであった。大正三年七月刊「校註国文叢書」（博文館）十一に池辺義象氏は、

此の段は、高橋文学士の朝鮮の物語集に、瘤取とて出でたると、殆んど相似たり。又右く笑林評にも類話あり、蓋し支那より出でたる伝説なるべし。

と頭註を加えて居られるが、野村八良氏の国民童話（大正十一年十月、国文講習会刊、文化双書十六）の第四章童話、丙、物真似童話「瘤取」に於ては、喜多村節信の「嬉遊笑覧」に存する話で、出典は明の萬暦中に楊茂謙が撰んだ笑林評という本から、その説話をあげて、

筋は簡単だが、型は全く瘤取式である。此も支那本来の説話か、いつ頃から行はれてゐるのか、充分に分らない。…高橋亨氏の編纂に成る朝鮮の物語集を見ると、我が国のと殆んど同一の瘤取話が出てゐる。偶然の類似と見るよりは、同一源泉の物かも知れない。昔から朝鮮にもあったといふのは、頗る面白い。筋の上で一寸した相違がある。それは瘤を以て美声の溜め所としてゐる事や、それを鬼が老爺から買取るとしてゐる点である。

として居られるので、いま高橋亨氏の「朝鮮の物語集」（明治四十三年九月、日韓書房刊）の全文（一―四頁）を挙げることは略すが、既に高木敏雄氏も「日本神話伝説の研究」（大正十四年五月、岡書院刊）所収の大正元年十一月十二日附で「東亜之光」に発表された「日韓共通の民間説話」の一文の中で、

瘤取説話は日韓説話である。其直接の本源地は朝鮮半島である。

そして「朝鮮（の脱？）物語集」の右述の話をあげて居られる。次に、中田千畝氏は「日本童話の新研究」（大正十五年六月、文友社刊）第三篇著名童話攷、第七瘤取り鬼の中で、「先づ著者が童年の頃に聞かされたものの記憶を記述して見やうならば大体次の通りである」として、殆ど宇治拾遺物語と同じ筋の話をあげて居られる。そして宇治拾遺と「朝鮮の物語集」とのそれを比考し「池辺義象氏のあげた「笑林評」の類話

を未だ知るを得ないから、何れともこれを判断しがたいが」として、池辺氏の「蓋し支那より出でたる伝説なるべし」の説には賛成して居られる。ところで、「笑林評」という書の原本は心がけながら遂に見ることができないが、文政十三年（一八三〇）序のある筠庭喜多村信節の嬉遊笑覧（十二巻）或問附録の中に「笑林評」を数か所引用しているが、「明万暦中、揚茂謙と云もの、多く古今の事林を輯録して毎條に評語を加へ〔笑林評〕と名く、又続編あり」とし、

○〔著聞集〕に鬼に疣をとられたる物語あり

の次につゞけて〔笑林評〕として次の文をあげて居られる。返り点や訓みは私の責任に於て加えた。（万暦は明の神宗（一五七三―一六一九）の年号である）

一人頂有懸疣(注2)。因取涼、夜宿廟中。神問「此何人」左右答云「蹴気毬(注3)者」。神命取其疣来。其人失疣、不勝踴躍而出。次晩、復有疣者来、宿于廟。神如前問之。左右仍以蹴毬者対。神曰「可昨将毬還他。」其人至旦竟負両疣而去。評云、患失之患復之(注4)。是求無益于得也。

そして「これと全く同じ」として居る。

註1　頂―項（うなじ）の誤か。
註2　懸疣―垂れ下る疣。
註3　気毬者―「気」は誤か。次には「毬者」とある。
註4　「復之」は「得之」の誤であろうか。

（訓み）

一人頂に懸る疣有り、涼を取るに因りて、夜、廟の中に宿る。神問ふ「此れ何人ぞ」。左右答へて云ふ「気(?)毬を蹴る者なり。」神命じて其の毬を取りて来らしむ。其の人疣を失ひ、踴躍に勝へ不して（而）出づ。次の晩、復疣有る者、来りて廟に（于）宿る神、前の如く之を問ふ。左右仍りて毬を蹴る者を以て対ふ。神曰はく「昨将ちし毬を他に還す可し」と。其の人、旦に至りて、竟に両疣を負ひて（而）去る。評に云ふ、之を失ふを患へ、之を復する（得る?）を患ふ。是れ求めて、得るに益無きなり（也）。

と訓んで見た。

○

この話は明らかに支那の話であるが、大分話が簡略化されて来ているようである。もう少し宇治拾遺の話に近似したものがないかと思っていたところ、幸に最近、成蹊大学の神谷正明博士から恵贈された「産語の研究校注篇」（昭和三十七年八月、書籍文物流通会刊）を拝見するに及んで、支那種であったことを確信もてたことは有難いことである。「産語」は、博士の長年研究された所によれば、「戦国末から秦代にかけての著作であると思ふ」とされる古書である。紀元前三世紀の頃の著作であるから、「瘤取り」説話の最も古い採録である。私はこの原文をひろく同好者に披露させて頂きたいという思いに堪えず、神谷博士が古板本を収められた影印本「産語」によって全文を抄出させて頂き、自分の訓み得たところを書き添えて参考に供することにした。誤読誤訳も多いことと思うので、高教頂けたら幸甚である。即ち産語（上下二巻）の上巻「皐風第六」に収められた説話で、返り点や次の訓みを加えた。

晉人有下患レ瘤二于項一者上。取二材于山一。還而日暮。投二空舍一宿レ焉。夜有二羣鬼一宴二于舍一。見二瘤者一曰。客何為者也。対曰。山下邑人。取二材于山一。日暮不レ可レ行也。故借二宿於此一。非二異人一也。鬼曰。子欲レ食乎。曰不レ欲也。欲レ飲乎。曰。唯欲レ酒。不レ欲二它飲一也。鬼曰。善。因飲レ之。宴酣。鬼謂二瘤者一曰。能歌乎。対曰。里巷下曲。恐不レ足レ聴已。鬼曰。第歌。瘤者撃レ節而歌。羣鬼咸称レ善。又曰。子能舞乎。対曰。下節。恐不レ足レ観已。鬼曰。第舞。瘤者起舞。羣鬼咸悦。曰。善。於レ是歓甚。至レ暁鬼将レ去。謂二瘤者一曰。吾曹夜必集二于此一。子豈能復来会乎。瘤者曰。諾。鬼曰。雖レ然。子能無二食言一哉。請必以レ物多レ質。瘤者曰。我樵夫。唯有二一斧一。它無レ所レ有。請以レ斧為レ質。鬼曰。唉。是何足二以為一レ質。観二子項瘤一。可二以為一レ質。因取二其瘤一。不レ痛且不レ見レ血。鬼既去。黎明。瘤者走帰レ家。家人覩二其亡一レ瘤。因問レ之。告二之故一。里人有上患レ瘤二于頸一者上。聞レ之。就二其家一而謁曰。子且復往乎。対曰。未レ必也。曰。余願摂レ子事。幸可二以去二吾瘤一也。曰。可也。里人遂往。夜鬼至。見二里人一曰。悪。是何非二昔者所一レ見也。里人曰。疇昔瘤者。不幸疾作。故使二予来謝二諸兄一也。鬼曰。子亦好レ酒乎。曰。否。能歌舞乎。曰。略能。令二之歌舞一。不レ善。羣鬼不レ悦曰。子歌舞不レ善。吾曹無二以為一レ歓。可二趨帰一。昔者所レ質。煩レ爾致二之前人一。因以二昔物所レ取之瘤一。著二里人項一。遂遣レ帰。旧瘤未レ除。更負二新瘤一而帰。唯不二自量一而徒羨レ人之禍也

とあるのがその全文で、次にその訓みを施したものを掲げる。

晉の人に項(うなじ)に瘤(注1)を患ふる者有りけり。山に（于）材(き)を取る。還らんとして（而）日暮る。空舎に投じて焉(ここ)に宿る。夜、群鬼有りて舎に（于）宴す。瘤ある者を見て曰はく、「客は何為する者ぞや（也）」と。対(こた)へて曰はく、「山下の邑の人なり。山に（于）材を取る。日暮れて、行く可から不る(ざ)なり（也）。故に此(ここ)に（於）宿を借る。異(あや)しき人に非るなり（也）。」と。鬼曰はく、「子(し)、食(くひもの)を欲するか（乎）」と。曰はく、「欲せ不る(ざ)なり（也）。」と。「飲(のみもの)を欲するか（乎）」と。曰はく「唯酒を欲す。它(た)の飲を欲せ不る(ざ)なり（也）。」と。鬼曰はく、「善し。」と。因りて之を飲む。宴酣(たけなは)にして、鬼、瘤ある者に謂ひて曰はく、「能く歌ふか（乎）。」と。対(こた)へて曰はく、「里巷(まちなか)の下曲(注2)なれば、恐らくは聴くに足ら不る(ざ)已(のみ)と。鬼曰はく、「第歌(ただ)へ」と。瘤ある者、節(せつ)を撃ちて（而）歌ふ。群鬼咸(みな)善しと称す。又曰はく、「子能く舞ふか（乎）」と。対へて曰はく、「下節(注3)なれば、恐らくは観るに足ら不る(ざ)已(のみ)。」と。鬼曰はく、「第舞(ただ)へ」と。瘤ある者起(た)ちて舞ふ。群鬼咸(みな)悦ぶ。曰はく、「善し。」と。是(ここ)に於て歓ぶこと甚だし。暁に至りて、鬼将(まさ)に去らんとす。瘤ある者に謂ひて曰はく、「吾曹(われら)必ず此(ここ)に（于）集まる。子豈能く復(ふたたび)来り会するか（乎）。」と。瘤ある者曰はく「諾。」と。鬼曰はく「然りと雖ども、子能く食言(しよくげん)無からんや（哉）。請ふ必ず物を以て質と為さん」と。瘤ある者曰はく、「我は樵夫(きこり)なり。唯一つ斧有り。它(た)に有する所無し。請ふ斧を以て質と為さん。」と。鬼曰はく、「唉(ああ)、是れ何ぞ以て質と為すに足らんや。子の項(うなじ)なる瘤を観るに、以て質と為す可し。」と。因りて其の瘤を取る。痛からず（不）、且つ血を見ず（不）。鬼既に去る。黎明、瘤ありし者走りて家に帰る。家人其の瘤亡(な)きを覩(み)る。

因りて之を問ふ。之に故を告ぐ。里人、頸に（于）瘤あるを患ふる者有り。之を聞きて、其の家に就きて（而）謁して曰はく、「子、且つ復往くか（乎）。」と。対へて曰はく、「未だ必せ不るなり（也）。」と。曰はく、「余願はくは、子に摂りて事へん。幸に以て吾が瘤を去る可きなり（也）。」と。曰はく「可なり（也）」と。里人遂に往く。夜、鬼至る。里人を以て曰はく、「悪、是れ何ぞ昔者見る所に非るなり（也）。」と。里人曰はく、「疇昔瘤ある者、不幸疾作る。故に予をして来りて諸兄に謝せ使むるなり（也）。」と。鬼曰はく、「子も亦酒を好むか（乎）。」と。曰はく、「否」と。「能く歌舞するか（乎）。」と。曰はく、「略能くす」と。之をして歌舞せ令む。善からず（不）。群鬼悦ば不して曰はく、「子の歌舞善からず（不）。」吾曹以て歓を為すこと無し。趨かに帰る可し。昔者質とする所、爾を煩はして之を前の人に致さん」と。因りて昔者取る所の（之）瘤を以て、里人の項に著く。遂に帰ら遣む。旧の瘤未だ除かず、更に新しき瘤を負ひて（而）帰る。唯自ら量ら不して（而）徒らに人を羨む（之）禍なり（也）。

註1—項（うなじ）は頸（のどくび）に対するえりくび。両瘤は頭の前後に著いたことになるが、日本の話では両頬で、左右に著いたことになる。

註2—下曲は「下節」と同様に下等な歌曲。

註3—下節は下等の曲節。

右の説話の終末の評言として、

「唯自ら量らずして徒らに人を羨む禍なり。」とあるのと、宇治拾遺の「ものうらやみはすまじき事なりとか」の結びとは軌を一にしていることで、話の教訓性の故に日本にも承け入れられ易かった話ではなかったか。

○

ところで関敬吾氏は「日本昔話集成」第二部本格昔話2（昭和二十八年八月、角川書店刊）の「十八、隣の爺」の中に「一九四、瘤取爺」の項目を立てて、岩手県和賀郡黒沢尻町で採集されたという話をあげ、「分布」として、青森県・山形県・福島県から埼玉・新潟・長野・静岡・和歌山・広島・佐賀・大分各県に至る昔話を二十数話掲げ、長野県小県郡の話を「宇治拾遺物語と同一だといふ」と説明されて居る。静岡県浜名郡芳川村の話も「爺が山に行って雨にあひ木の洞穴に入ると、奥で鬼が酒盛りをして踊ってゐる。爺が出て踊ると酒を飲ませてもてなし、明日も来るやうにと瘤をとる。隣の爺がまね踊が下手なため、瘤をくっつけられる」とある。洞穴とあるのは、鼠浄土系統の話に近づいているようだ。そして氏は「型」として、

一、瘤のある爺が山の洞穴に入ると鬼（天狗）が踊ってゐる。

二、仲間になって踊ると明日も来いと瘤をとる。

三、隣の瘤のある爺がまねて踊が下手でいま一つの瘤をつけられる。

という話根（ルート）をあげられる。空舎（あきや）の群鬼、廟中の神、洞穴の鬼や天狗。すべて精霊の住みかに宿ったと考えられたもので、それらの内部で出逢うということに変えられたものであろう。ここにも信仰の推移が見られる。朝鮮の話でも、また大きな瘤を下げた爺が、山に採薪に行き、日が暮れたので、道傍の一軒の荒屋に薪をおろして、今夜はここにと覚悟していると、異種異形の妖怪共の何時ともなく現れ来りて取巻いて居列ん

だ。

かゝる所に妖怪の住むべきは勿論の事なれば、逃げも隠れもせんとは思はず。却て弱味を見せじとて、矢張声高に更におもしろき歌共数を尽して歌ひたり。余りの上手に満場寂として音なく、妖怪共も感に堪へざる様子なり。（朝鮮の物語集「瘤取」）

ということになって、妖怪が老爺にどうして美声を出すのかと聞く。すると、老爺はこの大きな瘤こそ我が声の溜め所だとだましていうと、瘤怪が売ってくれというので種々の宝物と交換したという商売気を感じさせる老爺の話に展開するが、これは支那の話とも日本の話とも大分着想が違っている。日本の話（宇治拾遺）は、鬼が翁の顔の瘤を取ろう。瘤は福の物だから惜しがるだろうというと、翁は、「ただ目鼻をば召すとも、此こぶはゆるし給候はん…」と、鬼のアマノジャク的性質を見とおしていて、わざと計略的に惜んで見せるのを、案の如く鬼は「かうをしみ申物也。たゞそれを取べし」といって、取ったことになっている。それは「大かた痛き事なし」といっている。これは朝鮮の話よりはむしろ支那の話に近いように思われる。支那の話では、鬼が「請ふ必ず物を以て質と為さん」というのに対して「唯一斧有り…」というのを、鬼は「項の瘤」に目をつけて質として瘤を取ったことになっている。つまり日本の話は、朝鮮のとは伝承上兄弟関係のように思われるが、支那のとは親子関係であろう。ともあれ「産語」に瘤取りの説話が教訓話として採り入れられていたことは十分注意されることである。

序でながら、拙著「宇治拾遺物語・打聞集全注解」（昭和四十五年四月、有精堂刊）の中に、次の補正を煩わし得たら幸甚である。

一六頁の表、巻一ノ三（鬼瘻）の第六段に

産語巻上皐賓第六・笑林評・朝鮮の物語集

四九頁終から二行、「笑林評」の次に

（嬉遊笑覧、或問附録「鬼に疣とらるゝ」参照）・産語巻上

を補う。

（昭和四六・一・一〇稿）

本紀要第四号正誤　　中島悦次

第四号拙文『宇治拾遺物語「鬼に瘻取らるる事」について』の文中

三〇頁下段一二行「神谷正明×博士」は「神谷正男○博士」の誤であることを校正の際に見落しまして大変失礼しました。謹んで訂正いたします。なお、三三頁上段七行の「瘤」は「妖」の誤です。